第１号、1992年７月15日

経済学史学会ニュース

The History of Economic Thought Society Newsletter

No.1 July 1992

新しい国際化

小林　昇

わたくしはむかし（1936年）大学を受験するころ、はじめは日本史か日本文学を専攻しようと思っていた。それが経済学部に入ったのは、親を養う立場になったからである。「文科を出たのでは飯が食えない」というのが、このごろとはまるで違う、当時の常識であった。日本が第２次産業までをしかほとんど持たなかったころのことである。しかし、先の読めないのが人生である。まして、経済学部を出たあげく学界でもいちばんつぶしのきかない学史という分野を耕すことになったのは、誤算とも皮肉ともいいようがない。

わたくしが日本文学を専攻していたら、外国の大学で通訳つきの講義をしたり、著書が外国語に翻訳されたりする機会に恵まれたかもしれない。自国の精神の泉を掘ることで、わたくしはいまの自分よりもずっと広くて深い国際的経験を持ちえたような気がしている。

しかし経済学は西欧の、とくにイギリスの学問であり、学史の対象となるときにはなおさらそうである。だから日本人の学史研究者は、原則として輸入業者にとどまるか、あるいは西欧の学界への参入を許されるかするにすぎない。もとより、日本人が西欧の手法で日本経済を分析する場合には、これと違って、西欧人たちが求めて知りたいような独自の業績が生まれる可能性はある。いくらか奇異に聞こえるかも知れぬが、山田盛太郎の『日本資本主義分析』は、日本的経済学ともいえるであろう。ただし、このごろとみに開拓されている日本経済思想史の研究は、外国人の関心をひいてはいるけれども、それは日本の啓蒙史への関心であって、日本文学への彼らの関心などとは次元の違うものだと考えるべきであろう。

ところがこれが経済学史という領域になると、なにしろ経済学という知識財の生産のゲネシスに日本人はまったくかかわらなかったので、研究者ははじめから輸入業者に終ることを覚悟していなくてはならない。ただしむろん輸入加工業というものも存在するし、またこのごろは情報も人的交流も発達しているので、われわれがすすんで西欧人に立ち交じって個性のある仕事を学界に提供することはできる。外国語の表現に堪能な若い世代もたしかに増えているであろう。

しかしわたくしのいいたいのは、情報化の拡大とわが国での蓄積とに伴って、日本の輸入業者とくに輸入加工業者の仕事を、外国の知的生産者がこのごろとみに切実に知りたがっているということである。彼らは自分たちの関心の範囲での、また自分たちと競合するテーマに即した、日本人の研究の欧文での発表を、しだいにつよく求めている。わたくしのように輸入加工業に甘んじてきた者にも、業態の積極的報告を要求する声が届くし、それを怠っていると、遠国での学会の報告に引っぱり出されたり、古典の復刻に解説を書けといわれたりする。それに、心苦しいことに、「君はわれわれのテーマについて２冊も本を書いていると聞くのに、われわれが英文で読めるのは論文一つだけだ」という内容の苦情を、婉曲にほのめかされたりする。だからここ数年、わたくしも自分の仕事の欧語化に－残念だが日本語での文体を犠牲にして－ずいぶん時間を使わねばならなくなった。日本の経済学史研究も国際化を迫られているのである。この局面では、日本のスミス研究やマルクス研究が世界的水準にあるというような肥大した自尊はもう許されない。とくにマルクス研究は、彰義隊的な抵抗はやめて大きい転回を目ざすべきであろう。そうして、セレクトされた邦語論文の西欧語訳を目的とする機関の設立を企図して、学史学会は活動をはじめるべきではないだろうか。－われわれはとっくに国際社会にいるつもりで、存外実際にはそうでなかったのである。

第56回大会プログラム

日　　程：1992年11月7日（土）～8日（日）

場　　所：京都産業大学

（第二日目の共通論題「マルサス」に先立って、オーストラリアのJ.M.ブレン氏の特別講演が行なわれます。）

11月7日（土）第1日

		I	II	III
	9:50	開　会　挨　拶　I		
	9:55	報告者論題	報告者論題	報告者論題
	10:00			
1		伊藤誠一郎 （慶応大・院） ﾁｬｰﾙｽﾞ・ﾀﾞｳﾅﾝﾄにおける統治と経済	藤井　透 （京大・学振研） ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾅﾙ・ﾐﾆﾏﾑ，ﾓﾗﾙ・ﾐﾆﾏﾑ，ﾅｼｮﾅﾙ・ﾐﾆﾏﾑ －『産業民主制論』の構造と論理－	森岡邦泰 （龍谷大・非） 自然の支配と法則 －ﾃﾞｶﾙﾄからﾌｨｼﾞｵｸﾗｼｰまで－
	11:05			
2		川島信義 （西南学院大） J.ｽﾃｭｱｰﾄ「商業大国」盛衰の理論	林　　準 （国士館大・非） 再生産表式と資本循環	姫野順一 （長崎大） J.A.ﾎﾌﾞｽﾝの市場論と有機的要素 －1890年代における社会経済学の形成－
	12:05			
	13:00	昼　食　・　休　憩		
	14:05	総　　会		
3		森本　孝 （慶応大・院） ｱﾀﾞﾑ・ｽﾐｽの自然法学と『道徳感情論』 －ﾌﾟｰﾌｪﾝﾄﾞﾙﾌ『人間と市民の義務』との関連で－	神代光朗 （慶応大） ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞにおけるﾛｰｻﾞ『資本蓄積論』の研究について	林　康二 （専修大・院） ｼｭﾝﾍﾟｰﾀｰ『理論経済学の本質と主要内容』の理論的・方法論的視点（仮題）
	15:10			
4		稲村　勲 （札幌学院大） A.ｽﾐｽの政治経済学再考	河野裕康 （金城学院大） ﾋﾙﾌｧﾃﾞｨﾝｸﾞの初期の経済政策思想	池尾愛子 （国学院大） 米穀市場についての統計学的研究 －日本における初期の経済学研究－
	16:15			
5		前原正美 （横浜国大・非） J.S.ﾐﾙの理想的社会像と国家	倉田　稔 （小樽商科大） 後期ﾋﾙﾌｧﾃﾞｨﾝｸﾞの経済学	飯田　肇 （二松学舎大） 石橋湛山とその政治経済思想 －大正ﾃﾞﾓｸﾗｼｰ期の経済思想－
	17:15			

11月8日（日）第2日

		I
	10:00	報告者論題
6		小林弥六 （筑波大） 友愛主義社会の思想について（ﾎﾟｽﾄ資本主義の第三の思想）
	11:05	
7		J.M.ﾌﾞﾚﾝ （Univ.of N.E.） Why Modern Economists Should Read Malthus' Principles of Political Economy.
	12:05	
	13:00	昼　食・休　憩
	13:10	共　通　論　題
		横山照樹 （同志社大） ｽﾐｽとﾏﾙｻｽ
	14:00	
9		渡会勝義 （明治学院大） ﾏﾙｻｽとﾘｶｰﾄﾞｳ －ｽﾐｽからの異なった展開－
	14:50	
10		馬渡尚憲 （東北大） ﾏﾙｻｽとJ.S.ﾐﾙ －方法論と理論の関係－
	15:40	
		ｺｰﾋｰ・ﾌﾞﾚｰｸ
	16:00	
		ﾊﾟﾈﾙ・ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ
	17:00	
		閉　会　挨　拶

『経済学史 ― 課題と展望』(仮題)について

(経済学史学会40周年記念論文集)

同編集委員会

6月6日の幹事会で報告された内容は以下の通りです。

① 進捗状況

現在初校ゲラが出来上がりつつあり、順次、内校のうえ、執筆者に校正してもらうゲラの発送作業をしています。

② 本書の構成

本書は以下の9つの柱から構成されることになっております。

(1)方法の問題、(2)啓蒙と経済学、(3)古典派経済学の形成、(4)古典派経済学の展開、(5)社会主義、歴史主義と経済学、(6)マルクスとマルクス主義、(7)近代経済学、(8)ケインズとケインジアン、(9)経済学の導入

③ 本書の体裁

B5版、本文二段組(『年報』と同じ体裁)

④ 販売計画

本書の市販価格は、3,500円程度になる予定ですので、学会から会員1人につき 1,500円を補助することになりました。したがって、会員1人1冊に限り 2,000円(消費税込み、送料別)で販売します。

2冊目からは、直接出版会に申し込まれた場合に限り、市販価格の8割で販売し、送料は出版会が負担します。

⑤ 販売方法

(1) 大会プログラム発送時に、注文書を同封いたしますので、ご注文いただけます(送料必要)。

(2) 大会当日、会場の京都産業大学で、直接販売いたします。

出版されましたら、会員の方々はもちろんのこと、各所属の大学や図書館でご購入いただきたく、よろしくお願いいたします。また、大学や大学院の授業でテキストないし参考文献としてもご利用下さい。

国際学会について

今年度以降,以下の国際学会が予定されています。詳しくは,担当常任幹事の平田清明会員,または学会事務局まで,お問い合せ下さい。

1. Thomas More International Conference, "New World and Utopia ", 6-12 July.
   St. Patrick's College, Manly Sydney, Australia.
2. International J.A. Schumpeter Society, "Innovation in Technology, Industries, and Institutions: Comparative Perspectives", 19-22 August 1992. (シュンペーターを経済思想史のなかに位置づけるセッションもくまれている) 京都国際会議場にて開催
   連絡先:一橋大学 塩野谷祐一会員
3. World Congress of International Economic Association (IEA), 24-28 August, 1992. Moscow. Session: History of Thought.
   連絡先:Jacky Jennings
   Room R432, STICERD, London School of Economics, Houghton Street, London WC2A 2AE, UK
   あるいは 東京大学経済学部 根岸 隆会員
4. History of Economic Thought Conference 1992. 7-9 September, 1992. University of Exeter, UK
   Dr. John Maloney
   Department of Economics, University of Exeter, Amory Building, Rennes Drive, Exeter, England
5. Karl Polanyi Institute of Political Economy 4th Conference, "Beyond Market and State: survival strategy or autonomous development", 12-14 November, 1992. Concordia University, Montreal, Karl Polanyi

Institute of Political Economy, Concordia University, 1455 de Maisonneuve W. Montreal, Quebec H3G 1M8, Canada

6. International Conference on Peter Alexeevich Kropotkin (1842-1921), December 1992, Moscow
(順調に進行しているかどうかは不明)
Professor N.K. Figurosvskaya
Institute of Economics, USSR (?) Academy of Sciences, Ul. Krasikova, 27, 117218 Moscow, Russia

7. History of Economics Society, 26-29, June 1993. Temple University, Philadelphia,
Prof. Ingrid Rima, Department of Economics, Temple University, Philadelphia, Virginia, U.S.A.

8. The 11th International Economic History Congress, August, 1994. Milan, Italy.
Prof. Piero Roggi
Instituto di Storia delle Dottrine Economiche
Facolta di Economia e Commercio, Via Montebello, 7. 50123 Florence, ITALY

9. Social Science History Association, 3-5 November 1992, Chicago.
(内容不明) Correspondent: Margo Anderson (Dept. of History, Univ. of Wisconsin-Milwaukee, Milwaukee WI 53201. U.S.A.

10. International Conference of the Historians of the Labour Movement, 15-19. Sept. 1992. Linz.
"Class, Gender, Ethnicity"
Dr. Barry McLoughlin, Secretary, ITH, Altes Rathaus, Wipplinger Strasse 8, A-1010 Wien, Austria

11. Third International Conference, Aalborg, Denmark
The International Society for the Study of the European Ideas (History of European Ideas), 24-29 August 1992, "European Integration and the European Mind".
Prof. Ulf Hedekoft, European Research Unit, Aalborg Univ., Fibigerstraeda 2, 9220 Aalborg, Denmark

＊フランスのシャルル・ジイド経済思想研究協会の活動については現在照会中
l'Association Charles Gide pour l'Etude de la Pensée Economique
c/o Professor R. Arena, LATAPSES・CNRS
250 rue A. Einstein, Sophia Antipolis
06 560 VALBONNE Cedex FRANCE

12. International Conference on the international spread of physiocracy, 23-24 Septembre 1993, Paris
Professeur Philippe Steiner
Centre Alexandre Vandermonde pour l'histoire de la pensée économique.
E.N.S. de Fontenay-Saint Cloud
31 Avenue Lombart
92260 Fontenay aux Roses FRANCE
Fax (1) 47,02,34,32

13. Le colloque du Tricentenaire du Dr. F. Quesnay
du mercredi ler juin au vendredi 3 juin 1994, Versailles et Mēré
Mme Jacqueline HECHT
Institut National D'études Démographiques 27, rue du commandeur, 75675 Paris Cedex 14
Fax: [33(1)] 43 27 72 40

『経済学史学会年報』第30号について

『年報』編集委員会

今年度から新しい編集委員会方式で編集されるようになりました『年報』30号は、着々とその編集を行なっております。6月の幹事会で報告された30号のうち、公募論文の選考結果はつぎの通りです。

【公募論文】　原稿締切までに5編の投稿がありましたが、以下の4編を採用することに決定しました（掲載順）。

①森村　敏己「エルヴェシウス：功利主義における名誉心－道徳哲学から政治改革論へ」

② 竹内　洋「初期のJ.S.ミルと貨幣数量説－『経済学原理』への課題の形成」

③ 御崎加代子「ワルラスと国家－平等・競争・企業者」

④ 加納　正雄「ケインズ『一般理論』における資産の集計構造と金融政策の有効性」

その他、【論文】として4編が、【研究動向】として、5編が、また、【書評】として15編（欧文）・11編（邦文）が掲載される予定です。

『経済学史学会年報』への公募論文の掲載にかんする要綱

1. 投稿資格は経済学史学会の会員に限られる。
2. 論文は毎年公募する。投稿論文の締切は毎年4月末日（必着）、提出先は『年報』編集委員会とする。
3. 掲載される論文の原稿枚数は、400字詰50枚以内とする*。
4. 『年報』編集委員会は投稿論文1本につき2名のレフェリーを会員中より選び、審査を依頼する。レフェリーは匿名とする。
5. 論文は投稿者名を伏せて審査されるものとする。投稿者は氏名を明記した論文と氏名を削除した論文コピー2部（レフェリー用）の計3部を提出すること。投稿論文は、ワープロ原稿であることとする。原稿は返却しない。
6. 『年報』編集委員会は各レフェリーの報告を受けて、採否の最終判定を行なう。

＊　英文論文の語数と和文論文の英文アブストラクトの語数については、『年報』編集委員会に問い合わせて下さい。

“経済学史における編集者”ローザンヌ会議

八木紀一郎（京都大学）

昨年の9月26・27日にローザンヌ大学ドリニイ・キャンパスで開かれた国際会議は、ローザンヌが再び経済思想史研究者の関心を集める都市となる前触れかもしれない。この会議では第一に“Editing Economists”つまり、経済学者の著作集編集にかかわる問題が技術面・内容面の双方にわたって議論された。第二に“Economists as Editors”つまり、経済学者自身の編集者としての活動が、個別例に即して議論された。この会議で得られた最新情報はワルラスの講義録の発見で、その整理にあたっているパスカル・ブリデルは「資料の津波がうぶな研究者を呑込んだ」とぼやいていた。それでも彼はなお意気軒昂にローザンヌ再興の第二弾の企画を準備しているようだ。

アメリカ経済学史学会　１９９２年度大会

田中敏弘（関西学院大学）

今年はワシントン、D．C．に近いフェアファクスのジョージ・メイソン大学で、５月30日～６月２日に開催された。約140名が出席し、95の研究報告が3分科会方式で行なわれた。この他に、１つの方法論に関するラウンド・テーブルと１つのパネル・ディスカッションが組まれた。今回は各報告のフルテキストの前もっての配付は行なわれず、当日配付のアブストラクトだけが頼りだった。全体として言えることは、ベテランの報告はやはり興味深かったが、その他のものは15分からせいぜい20分の報告ということもあり、要約だから、概して荒っぽい報告という印象を受けやすい。２日半で95本というのだから、やむを得ないのかもしれない。

今大会には、“Remembering Joseph Dorfman(1905-1991)”という、きわめてユニークなパネル・ディスカッションのセッションが組まれた。これは、昨年７月に亡くなったドーフマンを記念する特別な試みだった。パネリストは、次の８名だった。A.W.Coats, C.D.Goodwin, Abraham Hirsch, M.N.Rothbard, Warren Samuels, S.F.Wasser, Ruth Wedgwood, と小生。これらのうち、４～５名はドーフマンから Ph.D.をもらった弟子だった。

32年前の1960～61年にコロンビア大学大学院でドーフマンに個人的な指導を受けた小生は、ドーフマンの教え子のひとりとして特に招待されてパネルに参加した。この目的のために今回は参加することになったと言える。各パネリストは、自分とドーフマンとの個人的関係にふれつつ、ドーフマンの経済学史研究の特徴について、それぞれの仕方で客観的に指摘するもので、経済学史研究方法論との関係で興味ある内容のものだった。なかでも最も印象的だったのは、ドーフマン以前のアメリカでは、経済学史研究はホビーに過ぎなかったのであり、本当の専門的学史研究は、ドーフマンを画期とするということだった。

私自身は、「経済学史家としてのJoseph Dorfmanと日本におけるアメリカ経済学史研究」について15分程で手短に報告した。第２日目の夜８時15分から10時という時間帯にもかかわらず、60名以上の参加があり、充実したひとときだった。

今回、ドーフマン教授の遺族による学会への寄付により、卓越したPh.D論文に対して与えられる賞である“Dorfman Best Dissertation Award”が設けられ、毎年授与されることになった。なお、ドーフマンが所蔵していた貴重な文書、手紙類はすべてDorfman Papersとしてコロンビア大学図書館に寄贈され、目下整理されつつあることを付記しておきたい。日本からは、他に学術会議派遣で田中正司会員（研連委員）と松浦保会員が参加された。来年度大会は1993年６月26～29日、フィラデルフィアのTemple University で開催予定。

日本学術会議の動きについて

山﨑　怜（香川大学）

1. 第15期の日本学術会議は91年７月22日に発足し、同日から24日にかけて第112回総会が本会議講堂で開かれた。22日は辞令交付式のあと、総会で会長および副会長の選挙があり、会長には、13期、14期に引きつづき近藤次郎会員（第５部），人文科学部門の副会長には川田侃会員（第２部），自然科学部門の副会長には渡邊格会員（第４部）が選出され、３氏から就任のあいさつがあった。23日には14期の総括的な活動報告と所見、予算等につき感慨が述べられ、第15期活動計画委員会設置の提案についての事前討議、その後、各部会も開かれ、24日には前記提案の具体的な表明、各部会での委員選出、活動についてのアンケート実施を決定した。第15期会員の推薦・任命制の３回目にあたり、経済学史学会が登録する「経済理論」研連委の団体は、本学会（会員数803），経済理論学会(1,018)，社会思想史学会(638)，社会主義経済学会(223)，理論・計量経済学会(1,952）の５つである。その会員定数は４であり、山﨑，鶴田満彦，安川悦子，宇澤弘文（学会登録順）が今期の会員である。なお、その後の経緯の中で、「経済理論」研連委の委員長に鶴田会員を選出した。また、第３部の部長に大石泰彦，副部長に島袋嘉昌，幹事に藤井隆、岡本康雄の各会員を選出した。
2. 91年10月に第113回総会、92年４月に第114回総会が開かれ、第15期の活動目標、(1)人類の福祉・平和・地球環境の重視，(2)基礎研究の推進，(3)学術研究の国際貢献の重視と取り組み，7つの特別委員会を発足させた。
3. 第３部会も総会と連合部会ごとに開かれ、関係事項を審議・決定しているが、現在の懸案事項は研連委員は定数配分の見直し論であり、事務局試案の14種のほか、後藤幸男会員による私案が出され、「経済理論」研連委はプロジェクト研連委の定数の弾力化を提案している所である。なお、山﨑は「経済理論」研連委のほか、技術革新問題研連委，第１常置委，死と医療特別委に配属している。

幹 事 会 報 告

（6月6日，同志社大学）

6月6日に常任幹事会，幹事会が開かれました。主な報告事項と審議事項は以下の通りです。

① 1991年度決算および1992年度予算が承認されました。

経 済 学 史 学 会 1 9 9 1 年 度 会 計 報 告

収支決算書（1991.4.1～1992.3.31）

収	入	支	出
前期繰越金	4,994,882	大会費	697,684
会費	3,946,000	部会補助費	172,249
前受会費	50,000	会議費	185,120
『年報』売上	81,000	『年報』発行費	1,114,580
文部省助成	320,000	公募論文選考費	17,000
利子収入	60,255	40周年記念事業費	265,360
		学会事務センター費	1,179,628
		『年報』編集委員会費	240,296
		補助費	70,000
		学会連合分担金	30,000
		事務局費	280,031
		小計	4,251,948
		次期繰越金	5,200,189
合　　計	9,452,137	合　　計	9,452,137

経 済 学 史 学 会 1 9 9 2 年 度 予 算

（1992.4.1～1993.3.31）

収	入	支	出
前期繰越金	5,200,189	大会費	700,000
会費*	3,800,000	部会補助費	300,000
年報売上	80,000	会議費	250,000
文部省助成	320,000	年報発行費	1,550,000
利子収入	50,000	（印刷 1,250,000＋編集費300,000）	
記念論文集売上	1,000,000	名簿印刷費	310,000
（@ 2,000×500）		記念論文集出版補助費	2,000,000
		学会ニュース印刷費	60,000
		学会事務センター費	1,200,000
		事務局費	350,000
		日本経済学会連合分担金	30,000
		小計	6,750,000
		次期繰越金	3,700,189
合　　計	10,450,189	合　　計	10,450,189

＊（ただし、会員数約800名、会費納入率95パーセントと想定）

② 第56回大会（京都産業大学）において、共通論題「マルサス」に先立って、オーストラリアのJ.M.プレン氏による特別講演が行なわれることが承認されました。

③ 第57回大会（場所未定）の共通論題に、「日本経済思想史」をとりあげることが決定され、オーガナイザー3名（宮崎犀一、住谷一彦、長幸男）の推薦がなされ、準備が始まりました。

④ 会員の退会について
以下の会員の退会が承認されました。

石原博，松田弘三；岩見昭三，折笠和文，米澤忠幸，大津定美，都留康；岩瀬二三夫，岩野茂道，内田忠寿，金田良治，清水正昭，永岡薫，森義隆

⑤ 『40周年記念論文集』の会員販売価格および領布方法が承認されました。

⑥ 『経済学史学会ニュース』第1号の編集方針が承認されました。

⑦ 新入会員について
入会申込みがありました以下の方々の入会が承認されました。

甲斐エイ子　宮城工業高等専門学校
価値と生産価格の相互関係の論理について
小関　隆　東京農工大学一般教養部（工学部）
イギリス・アイルランド社会思想史
田中　秀臣　早稲田大学（院）
J.ミルの市場法則について
中山　孝男　東邦学園短期大学
D.リカードの機械論をめぐる諸問題
松井　名津　大阪市立大学（院）
J.S.ミルの社会・経済思想

現在の会員数は、799名となりました。

⑧ 「経済学史における編集者」ローザンヌ会議への八木紀一郎会員の派遣に当り、日本経済学会連合から補助金を受けました。

⑨ アメリカ経済学史学会年次大会への学術会議からの派遣は、当初の根岸隆会員から田中正司会員に変更し、田中会員が出席しました。

⑩ 『年報』第30号掲載の公募論文の審査結果が報告されました。

松田弘三会員を悼む

松田弘三会員は、去年5月8日逝去された。享年71歳。1920年5月8日生まれ。1943年京都大学経済学部卒業。1946年同大学院に入学後、1947年に研究生となり、岸本誠二郎教授のもとで学んだ。1952年に立命館大学経済学部に奉職後、助教授、教授となり1965年に退職。1966年に東洋大学経営学部に移り、1988年に退職した。

著書に『科学的経済学の成立過程』（1959）をはじめ、『資本主義経済学史』（1956）、『社会主義経済学史』（1956）、『現代経済学原理序説』（1972）、『独占と恐慌の理論』（1980）、『危機にある独占資本主義の基礎範疇』（1982）などがある。　（事務局）

高野利治会員を悼む

高野利治会員は、去年10月14日逝去された。享年64歳。高島門下生として東京商科大学卒業、同特研生終了後、関東学院に就任し、経済学史、経済原理を担当した。1950年代から60年代にかけて、W.ペティに関する3連続論文（『経済系』他）のほか、共著『原典経済学』（同文館）、共著『経済学の歴史と理論』（新評論）、編著『経済学史演習』（新評論）をはじめ、『社会科学年表』第1巻（同文館）、その他共同翻訳書がある。

また、関東学院大学博士課程（経済学史・社会経済史専攻）の設置に尽力し、経済学史研究に寄与した。さらに、経済学部長、学長を歴任し、関東学院理事長を13年間つとめ、83年以降私立大学連盟理事を兼務するなど、一私学の発展のみならず、わが国の私学の発展にも貢献した。

（星野彰男）

編集後記

1）会員住所等の変更につきましては、本年秋に新しい名簿を発行する予定ですので、今回の『学会ニュース』では省略しました。なお、新たな名簿作成作業を7月から開始いたしますので、住所変更等ございましたら、9月中旬までに事務局へお知らせ下さい。
2）『ニュース』は、今回の第1号で、連絡性、記録性および提案などを考えて編集しました。今後、さらに検討を加えられ、改善されることを期待します。
3）今回の『ニュース』の編集実務は、篠原久、井上琢智が担当しました。ご協力いただきました会員各位に御礼申し上げます。

『経済学史学会ニュース』第1号
1992年7月15日発行
経済学史学会　代表幹事　田中敏弘
662　西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学経済学部（田中研究室）
Tel.0798-53-6111.Fax.0798-51-0944